前九年合戦終結九百五十年記念事業

第十一回企画展

検証！厨川柵

―古代末期のもりおか―

盛岡市遺跡の学び館

Ⅰ　前九年・後三年合戦

1　安倍氏と前九年合戦

10 世紀の後半、安倍氏は陸奥鎮守府胆沢城（岩手県奥州市）の在庁官人として台頭し、やがて奥六郡を代表する有力者となりました。安部忠好（忠良）は陸奥権守（次官）であり、その息子頼良（後頼時と改名）のころには、出羽の清原氏、磐井郡の金氏、伊具郡の平氏、亘理郡の藤原氏とも縁を結び、奥六郡を越えて、陸奥国府周辺にも影響を及ぼすようになりました。こうした中、永承 6 年（1051）、鬼切部（宮城県大崎市）において、陸奥守藤原登任と安倍頼良の間で戦端が開かれました。結果、安倍氏に大敗した登任は解任され、新任の陸奥守には、河内源氏の棟梁源頼義が着任します。この直後、安倍頼良は名を頼時と改め、源頼義に恭順します。これによって奥六郡はしばらく平穏でした。任期満了間近の源頼義が、鎮守府から国府に戻る途中、陸奥権守藤原説貞の子息の人馬が殺傷される事件が起こりました。嫌疑は安倍貞任にかけられ、源頼義は安倍頼時に貞任を引き渡すよう命じますが、頼時はこれを強く拒み、衣川の関を閉じて抵抗しました。

天喜 5 年（1057）源頼義は、奥地の鮑屋、仁土呂志、宇曾利三部（青森県東部）の俘囚の首（かしら）安倍富忠を懐柔して味方としました。これを聞いた安倍頼時は、富忠を説得に向かいますが、途中、富忠との戦闘で矢傷を負い、鳥海柵に帰り死亡します。この年の 11 月、磐井郡黄海（一関市藤沢）で源頼義と安倍貞任が戦い、烈しい風雪の中、源頼義の軍は惨敗しました。

陸奥守源頼義は朝廷に兵や食料の増援を奏上しますが、その可否について朝廷内でも意見がまとまらず、出羽守や諸国の武士たちも要請に応じませんでした。頼義は出羽の清原氏一族に内応をはたらきかけます。康平 5 年（1062）、清原武則がこれを承諾し、陸奥守に加勢します。

清原氏の来援によって安倍氏は劣勢に追い込まれ、小松柵、衣川関、鳥海柵、黒澤尻柵などの拠点を次々に奪われて、岩手郡厨川柵、嫗戸柵に立て籠もります。9 月 15 日夕刻からの攻撃に、安倍氏は強く抵抗しますが、17 日、強風を利用した火攻めを受けて、厨川柵、嫗戸柵は陥落し、ここに安倍氏は滅ぼされました。安倍氏に合流し、厨川で斬首された藤原経清の遺児清衡は、母と共に清原氏に入りました。

2　清原氏と後三年合戦

前九年合戦の後、清原武則は陸奥鎮守府将軍に任じられ、出羽の仙北三郡に加えて、安倍氏の奥六郡を併せて受け継ぎました。

延久 2 年（1070）、陸奥守源頼俊（大和源氏）と清原貞衡（海道平氏からの入婿？）は、衣曾別嶋（宇曾利）と閉伊七村（三陸沿岸部）の荒夷を征討しました。この主力は清原氏の強大な軍事力であり、この戦功によって、清原貞衡は鎮守府将軍を拝命します。

永保（1081～1083）のころ、清原一族では清原真衡が当主でしたが、真衡に権力が集中するにつれて、一族の間で対立が起こりました。発端は真衡と、一族の長老吉彦秀武との反目でしたが、やがて真衡と弟の清衡、家衡の争いになりました。陸奥守源義家は真衡を助けますが、間もなく真衡は病没し、清原一族は清衡と家衡の二派に別れて争います。陸奥守源義家は清衡を助け、沼柵に家衡を攻めますが、退けられます。翌年、家衡は伯父武衡とともに金沢柵（横手市）に立て籠もります。源義家と清衡は兵糧攻めで柵を落し、家衡、武衡は斬首されました。

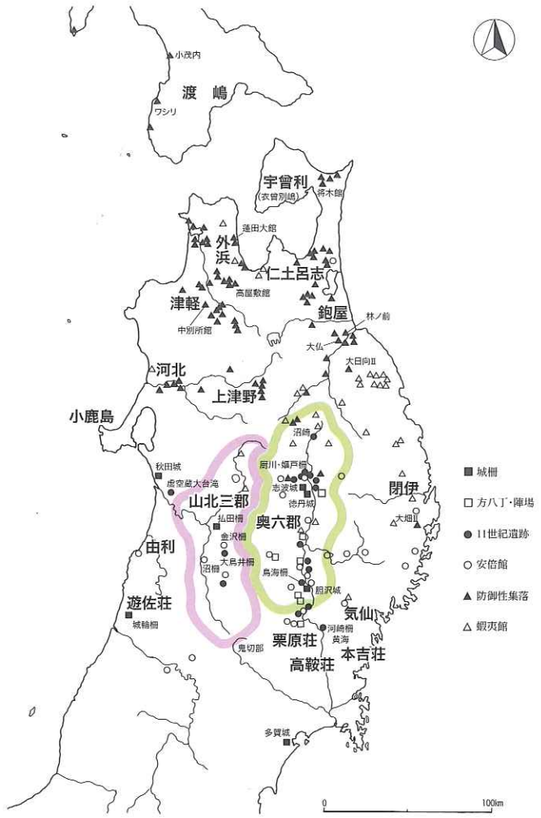
清衡は清原氏の奥六郡と仙北三郡をそのまま伝領し、父祖の藤原姓に戻り、江刺の豊田館から平泉に移りました。白河から外ヶ浜までの道程の中間に中尊寺を建立し、仏教の浄土思想を機軸とした国づくりを進めました。

鳥海柵遺跡　　金ヶ崎町教育委員会

3　安倍氏の柵・清原氏の柵

陸奥話記のなかで安倍氏の柵の様子が判明するのは小松柵と厨川柵の二柵です。小松柵は一関市磐井川沿いと推定され、僧良昭の柵でした。官軍の中から選抜された 20 余人の隊が、険しい崖をよじ登り、柵下を切り破って城内に乱入したところ、「城中擾乱して潰敗した」とあることから、山か丘陵の尾根先端部に、柵で囲まれた、小さな一郭があったことがわかります。ただし、堀が存在したかどうかは分かりません。また、盛岡市厨川に存在した厨川柵は安倍貞任の柵で、「柵の西北に大きな沢があり、二面は河に面して、川岸は三丈有余（約 10m）」「河と柵の間に堀があり、柵の上には楼櫓が構えられていた」とあります。厨川柵は大沢と二面の河で三方を囲まれた台地にあり、自然の段丘崖に拠りながら堀、柵、櫓で防禦する柵であったことが分かります。ただ、北側が開放された地形であったらしく、この方面にどのような備えがあったのか分かりません。

陸奥話記の記述からも、安倍氏の柵には居館的な柵と山城的な柵の 2 種が存在したことが分かりますが、河崎柵では交通遮断施設としての柵の存在が指摘されています（羽柴 2004）。



安倍氏・清原氏城柵分布図

『前九年合戦絵詞』（部分）　　国立歴史民俗博物館所蔵

合戦前の安倍一族

馬上の人物は画面右から金為基、安倍宗任、安倍重任、安倍貞任、そして鉢巻の人物は、貞任の伯父・良昭。

Ⅱ　厨川柵・嫗戸柵研究史

1 盛岡藩における栗谷川古城の認識

正保年間(1644～1648)、幕命により盛岡藩が作成し提出した奥州南部領内総絵図(P24)には、安倍館遺跡（安倍館町）の位置に「古城　阿部貞任宗任陳場　栗屋川城」と記されています。次いで寛文７年(1667)、幕府巡見使が栗谷川古城を視察し、巡見使佐々隆直(又兵衛)の指示により、翌寛文８年(1668)に盛岡藩が調進した奥州之内岩手郡栗谷川古城図(P9)には、栗谷川古城の規模、構造、周辺地形、周辺村落の状況が記され、太田方八丁(志波城跡)を「方八町　八幡殿陣場」と記しています。つまり盛岡藩では、栗谷川城跡も志波城跡も、前九年合戦の遺跡であり、栗谷川城跡は安倍氏の厨川柵跡、太田方八丁は源頼義と源義家（八幡太郎）父子の陣場の跡であると主張しました。

ここが中世工藤氏の栗谷川城跡であることは、よく知られていましたが、厨川柵陥落から585年経過しており、安倍氏の厨川柵と工藤氏の栗谷川城が同じ場所であったと、明確に伝えられていたとは思われません。

では、なぜ盛岡藩では、栗谷川城跡を安倍氏の厨川柵としたのでしょうか。

中世の南部氏は、武田氏、小笠原氏、佐竹氏と同じく、清和源氏の流れをくむ武士団で、鎌倉時代には甲斐国南部郷(山梨県南部町)を本領とする御家人でした。後に甲斐から奥州に移住し、建武の新政以後、糠部の八戸を中心に定着し、一戸、三戸、七戸などの支族に分かれます。

この中で、戦国時代の糠部を代表した領主が三戸南部氏であり、この家を一門の田子信直が継承した後に盛岡南部氏が成立しました。正保の国絵図作成当時は重直が藩主でした。これ以前に、幕府は諸大名や旗本に命じて家系図を提出させ、寛永18年(1641)から寛永20年(1643)にかけて、寛永諸家系図伝を編纂します。盛岡藩主の南部氏も、諸大名と同じく、自らの系譜や領国統治の正当性を明らかにする必要性から、清和源氏の末裔とする系図を提出しました。

源頼義・義家は、その当時から広く知られた源氏の棟梁であり、厨川柵は祖先の偉業の地であったわけです。

文治５年(1189)、源頼朝が奥州藤原氏討伐の際、先祖の安倍氏討伐の故事になぞらえて岩手郡厨川に逗留し、工藤行光を岩手郡地頭に任命しました。盛岡南部氏もまた、祖先の偉業を顕彰するとともに、厨川と至近の盛岡において藩政を担う正当性を示す目的がありました。

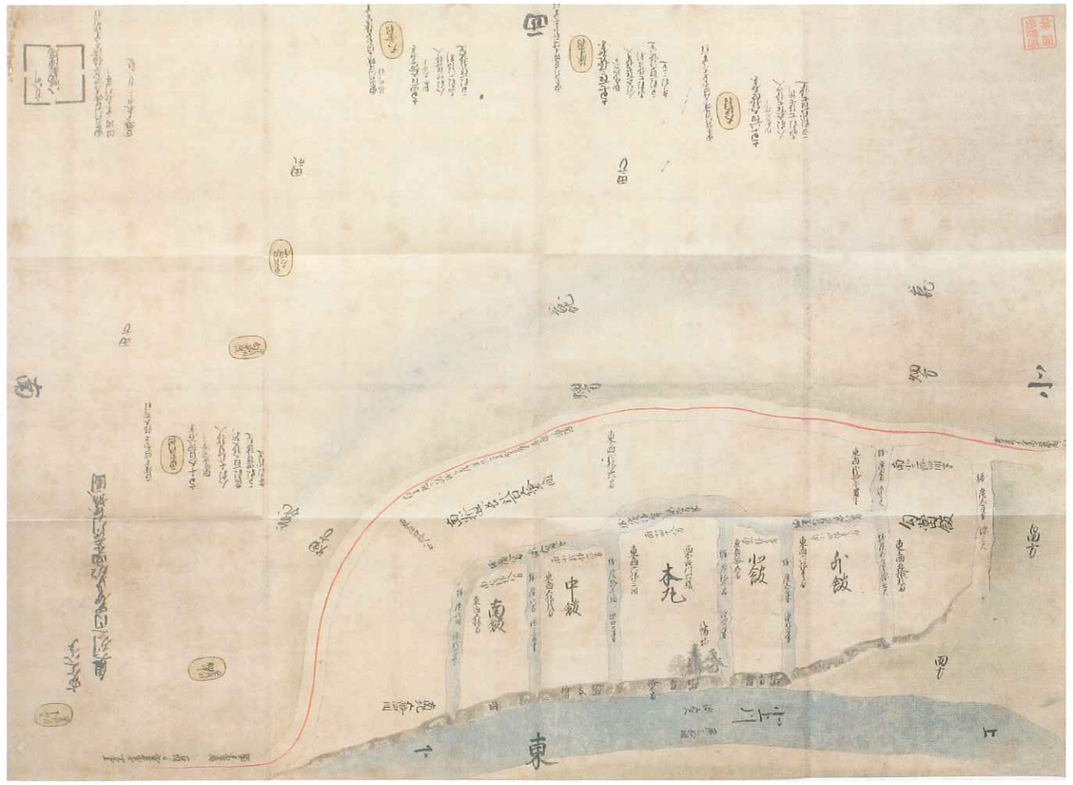
また、武家諸法度の一国一城制のなかで、深い空堀を残したままの古城の取り扱いについても、説明が必要であったのかもしれません。

この盛岡藩による厨川柵＝栗谷川城説が、その後の厨川柵、嫗戸柵研究に与えた影響は大きく、奥羽観蹟聞老志(佐久間洞巌1719)や、邦内郷村志(大巻秀詮1801)、盛岡砂子(星川正甫1833)、岩手県史談(志村義玄1899)など、明治に至るまでこの説が支持されました。

2 厨川柵・嫗戸柵所在地論争

厨川柵跡を栗谷川城跡とすることについて、最初に疑いをもったのは、歴史地理学者の吉田東伍でした。吉田は安倍館の地形は、陸奥話記の「件の柵の西北は大沢、二面は川を阻つ」という記述と合わないことや、地元では天昌寺近くの里館が安倍氏の本丸と伝承され、「貞任の居住したのは里館」であり、安倍館は「恐らくは安倍氏にあらず。実は工藤氏か。」として、中世工藤氏の栗谷川城跡と考えました(吉田1906)。また歴史学者岡部精一も、厨川柵は「安倍館よりも南の新田町付近から停車場(盛岡駅)付近にかけての一帯」と推定しています(岡部1916)。

大正から昭和初期にかけて、盛岡市と厨川村との合併に伴い、盛岡市は安倍館を厨川柵跡として顕彰し、城跡の保存整備を計画しました。これに対し、教育者であり歴史学者の菅野義之助は、文献考証と詳細な現地踏査、安倍館と里館の試掘調査によって、厨川柵は天昌寺西方台地の里館、勾當館、大館の一帯とし、嫗戸柵は大館か



「寛文八年奥州之内岩手郡栗谷川古城図」　旧南部家本　もりおか歴史文化館 所蔵

（同図　左上拡大）

「方八町　八幡殿陣場」
栗谷川古城より此所迄指渡壱里廿町程此
間雫石川有り
古城より未申の方に当る

Ⅲ　安倍氏時代の遺跡

1　はじめに

盛岡は北上盆地の北部に位置し、北上盆地を貫流する北上川に、最大支流である奥羽山脈を水源とする雫石川と北上山地を水源とする中津川・簗川が合流する地域で、各河川沿いには古くより交通路が整備され、沿岸部と内陸部を結ぶ拠点として重要な地域でした。

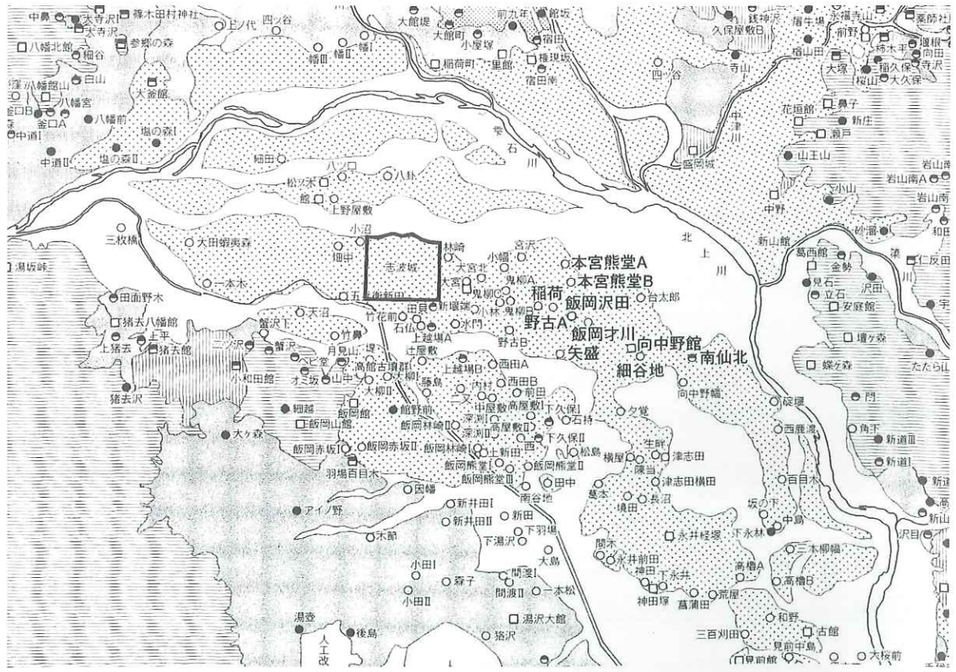
盛岡において平安時代の遺跡が集中するのは、①太田（本宮地区含）・飯岡・羽場地区が所在する雫石川以南、北上川以西の沖積段丘面、②浅岸地区が所在する中津川と米内川の合流点付近の段丘面及び中津川流域に形成された段丘面、③厨川地区が所在する雫石川以北、北上川以西の滝沢台地とその周辺部、④上田地区が所在する北上川以東、中津川以北の丘陵地、⑤乙部地区が所在する乙部川以南、北上川以東の段丘面の地区に大別され、その他にも市内各地から単発的に平安時代の遺跡は確認されています。

ここでは②～④とした地区、北上川・雫石川・中津川の 3 川が合流する付近から北部の遺跡から出土した 10 世紀から 11 世紀にかけての土器を中心に紹介します。

2　市内の古代遺跡

太田・飯岡・羽場地区　奥羽山脈に水源を持ち、北上川の最大支流でもある雫石川は、市の南西部の北ノ浦狭窄部で流路を狭め、狭窄部以東の広い平坦地に流入し、幾度も流路を変えながら広大な沖積地を形成し現在に至ります。

雫石川の旧河道沿いには低い段丘面が形成され、縄文時代後期（約 4,000 年前）以降からの遺跡が残されています。この地区で遺跡数が増加するのは、奈良時代以降からで、台太郎遺跡のような 120,000 ㎡を超える大規模な集落遺跡もあります。



雫石川下流域の遺跡分布図

時代が移り、平安時代の延暦 22 年（803）に志波城が造営されると、さらに遺跡数は増加します。その造営の影響がいかに大きかったのか知ることができます。

厨川・上田・浅岸地区　西部の厨川地区、北部の上田地区、北東部の浅岸地区では、古墳時代（4～7 世紀）からの古代遺跡（永福寺山・薬師社脇・大塚・堰根・宿田・宿田南・安倍館・大館町遺跡等）が確認されており、明確な集落が確認されるのは奈良時代（8 世紀代）からになります。

奈良時代の集落は大館町遺跡や浅岸地区の前野・大塚遺跡などで確認され、この頃になると北上川上流域においても玉山村釜崎遺跡、岩手町今松・仙波堤遺跡など大規模な集落が出現するようになります。

平安時代（9～12 世紀）になると、浅岸地区に所在する大塚・前野・柿ノ木平・堰根・薬師社脇遺跡のような大規模な集落が現れ、堰根遺跡のように 12 世紀まで断続的に遺構・遺物がみられる遺跡もあります。遺跡数は①地区の太田・飯岡・羽場地区に比べて少ないのですが、長期にわたり集落が存続している遺跡が多いことから、数は少ないながらも、土器による時期変遷を追える重要な遺跡があります。なお、盛岡市及び周辺地域において 10 世紀後葉から 12 世紀の遺跡は、9 世紀代の遺跡数に比べて極端に少なくなる傾向にあります。

3　厨川地区の遺跡

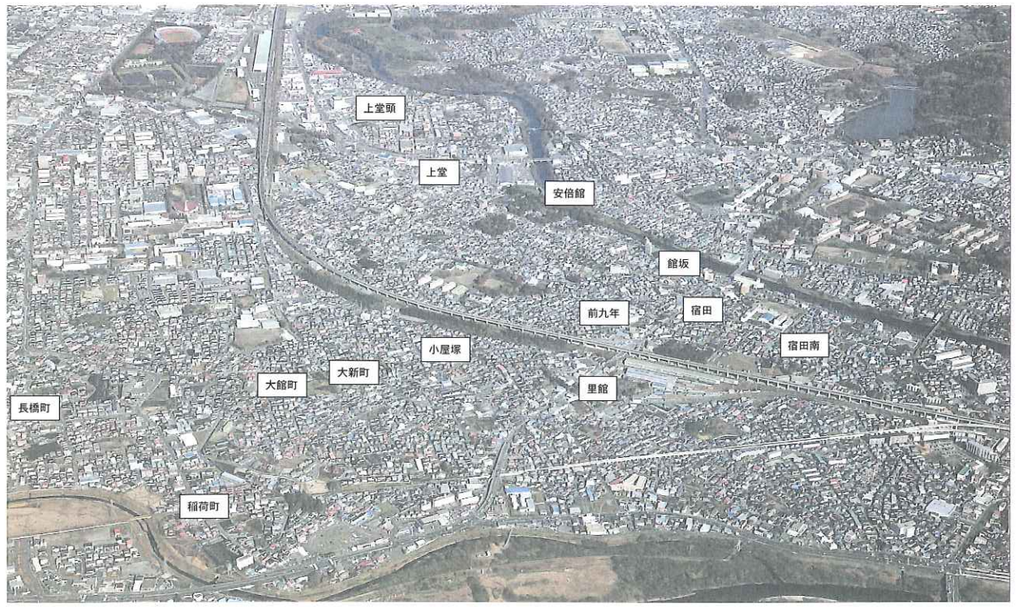
西部の厨川地区は、雫石川南岸の沖積地が広がる平野部とは異なり、遺跡が多く所在する雫石川北岸は台地縁辺部が入り組む急崖となって川に迫ります。

この台地は滝沢台地と呼ばれ、滝沢村柳沢付近から延びる南北約15㎞・東西約3.5㎞の範囲で、洪積世に形成された火山灰砂台地です。滝沢台地は南辺が雫石川に接し、東辺は北上川、西辺は北から流れる諸葛川を中心とした小河川により浸食された舌状の台地で、台地より低い場所には、川の浸食によって形成された狭い沖積面が発達しています。

厨川と呼ばれる範囲を地形的に述べると、前述した滝沢台地とその周辺に形成された低位段丘面がその範囲で、台地西辺部と低位段丘面の境界は、緩やかな傾斜をもって移行しますが、南辺は比高差3～5mの急崖となります。

この低位段丘面南辺に立地する里館遺跡（天昌寺町）付近では比高差約3mの急崖となり、雫石川氾濫原でもある新しい沖積面に至ります。この低位段丘面が安定した面になるのは古代末期以降（12世紀）で、稲荷町遺跡（12世紀）、里館遺跡（12～16世紀）など新しい時代の遺跡が主体的に立地しています。

低位段丘面より高位の滝沢台地上ではこれまでの調査により、縄文時代草創期（約1万年前）以降の遺跡



滝沢台地南端部の遺跡分布状況

Ⅳ　安倍氏の柵と遺跡の課題

安倍氏の厨川柵・嫗戸柵はどこに存在したのでしょうか。ここでは今までの発掘調査成果と、遺跡と地形との関係から、厨川柵・嫗戸柵研究の現状と課題を整理します。

1　厨川の地形と遺跡の関係（第 21 図）

岩手山の火砕流堆積物で形成された滝沢台地は、岩手山麓の滝沢村柳沢から、盛岡市みたけ、青山町を過ぎて、南東方向に張り出し、前九年一丁目付近で雫石川の氾濫原に接しています。この台地の西側は諸葛川（もろくずがわ）に限られ、東側は北上川が深く侵食しています。この間は小諸葛川や木賊川（とくさがわ）によって大別され、木賊川と北上川の間には、安倍館遺跡（栗谷川城跡）が存在します。この城跡は中世工藤氏（栗谷川氏）の居城跡であることが判明しています。この台地は南北に細長く、前九年一丁目の館坂まで突出しています。明治の初めごろ、この台地上のうち、館坂遺跡のあたりを「古館」、厨川小学校北側の台地先端付近を「館」と呼んでいました（盛岡の歴史を語る会 1979）。

木賊川の西側は、前九年三丁目から前九年一・二丁目、字狐森から字宿田に至る台地で、滝沢台地の背骨にあたります。ここは周囲の眺望がひらけ、台地上には近世の鹿角街道が通じ、南には雫石川と秋田街道を俯瞰できる交通の要衝に位置します。ここに宿田遺跡が立地し、7 世紀代の古墳の周隍内に堆積した、灰白色の十和田 a 火山灰層（915 年降下）の上から、11 世紀の小形坏と土師器の高台付坏が出土しています。この遺跡の西側には、東から前九年遺跡、小屋塚遺跡、大新町遺跡、大館町遺跡、大館堤遺跡が並び、それぞれが沢で分けられた台地上に立地しています。

この地域の南西側、滝沢台地より形成の新しい低位段丘面には、諸葛川東岸に稲荷町遺跡（12 世紀の居館跡）、その 400m 東には勾當館、里館、権現坂と呼ばれた里館遺跡（平安時代の集落跡と中世城館跡）が存在します。

2　大館町遺跡、大新町遺跡、小屋塚遺跡と溝

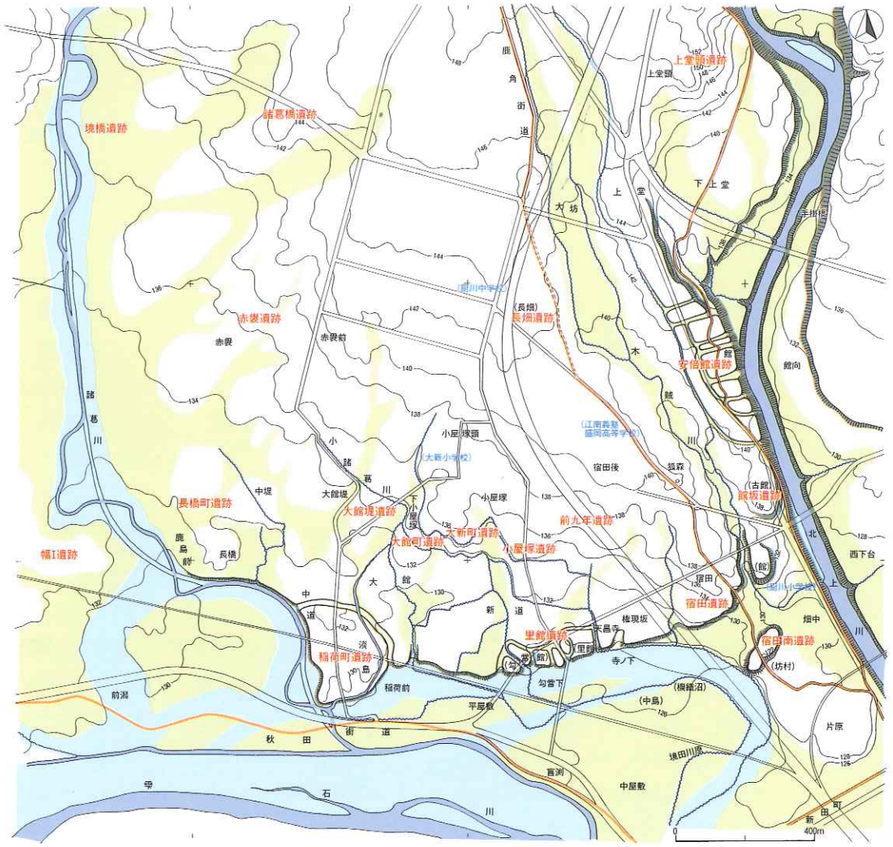
大館町遺跡は古くから縄文時代の集落跡として著名な遺跡であり、滝沢台地南西隅にあたります。台地の縁辺は沢地形が多数刻まれており、南側は低湿地となっています。この台地南辺や中央部には東西方向の溝があり、溝や周辺から 11 世紀から 12 世紀の土器が出土しています。特に 12 世紀のロクロかわらけと、手捏ねかわらけがまとまって出土しており、南西約 300m の諸葛川東岸にある稲荷町遺跡の 12 世紀の居館と関連がありそうです。注意されるのは、少量ながら 11 世紀の小皿や土師器高台付坏の破片が出土しており、11 世紀にこの台地が活用されていたことです。東側の大新町遺跡では 11 世紀の掘立柱建物群と東西の溝、小屋塚遺跡では 11 世紀の竪穴建物跡が存在します。この 3 つの遺跡から里館遺跡にかけて、小諸葛川からの用水堰が巡らされており、大館町遺跡では、用水堰の前身的な溝も存在します。この付近の区画性のある用水堰を厨川柵の堀の残影とする研究（佐嶋與四右衛門 1970）があり、傾聴すべき意見です。大館町遺跡には幅 2m、深さ 1m 以上の大溝も存在し、これ等の溝の年代や周辺の掘立柱建物跡、竪穴建物跡との関係、さらに溝がどのような形で巡るのかという、地形と溝との関係、溝と建物跡との関係や年代について、調査研究を進める必要があります。

3　11 世紀の遺跡

諸葛川上流の左岸には、境橋遺跡があり、11 世紀の土器がまとまって出土しています。上堂頭遺跡では、古い道を俯瞰する斜面に、2 間×3 間の掘立柱建物があります（P22）。建物の裏手には排水溝があり、11 世紀の坏や土師器の高台付坏が出土しています。遺構の様子から仏堂か社殿と考えられます。地名の上堂と関わる堂跡でしょうか。また、厨川ではありませんが、高松三丁目の高松神社裏遺跡からも、古い街道に面して、丘の斜面に不整形な溝があり、内部から 11 世紀の坏、土師器高台付坏、甕がまとまって出土しています。この溝は上堂頭遺跡と同様、建物に伴う排水溝の可能性があります。このほかに市内では、浅岸の柿木平遺跡、手代森の手代森遺跡で 11 世紀の小皿が出土しています。

同時期の岩手郡内では、滝沢村大釜の大釜館遺跡、八幡館山遺跡、岩手町川口の沼崎遺跡で、11 世紀の坏や小皿、土師器の高台付坏が多く出土しております。この 3 遺跡の出土土器は、鳥海柵跡の土器と共通しており、沼崎遺跡では台地を区画する堀が存在し、安倍氏の柵の一つと考えられます。また、大釜館遺跡では 11 世紀の大形掘立柱建物と沼崎遺跡や鳥海柵跡と共通する土器群が出土しております。さらに滝沢村大釜白山に存在する山城の八幡館山遺跡では、山頂から大釜館遺跡と同様の土器破片が数多く発見されております。

安倍氏関連の遺跡は、古い街道に面した山上や段丘上、または微高地上にあり、交通の要衝や地域の要となる場所に、当時の柵や集落、宗教施設が存在したことがわかります。



厨川の地形と遺跡

4　安倍氏、清原氏の柵と厨川柵、嫗戸柵

陸奥話記等に記された柵跡で、明確な遺跡は金ヶ崎町の鳥海柵跡であり、可能性の高い遺跡として、一関市川崎の河崎柵擬定地があります。また、前九年合戦で安倍氏を滅ぼし、後三年合戦で滅んだ清原氏の柵には秋田県横手市の大鳥井山遺跡があります。

安倍氏の鳥海柵は段丘に自然の沢が深く切れ込んで、南端に孤島のような一郭（鳥海Ａ遺跡）と、伝本丸、（鳥海

V　絵図に描かれた厨川

国絵図に描かれた厨川

江戸幕府は全国の大名を統制するため、たびたび国絵図の提出を命じ、旧南部家史料には提出した正保・元禄・天保期の国絵図の控えが現存しています。国絵図の作成にあたっては表現や規格の統一が図られ、縮尺は六寸一里(1/21600)、山川湖沼・名所旧跡・城郭港湾・陸海路などを書き込むことが求められていました。

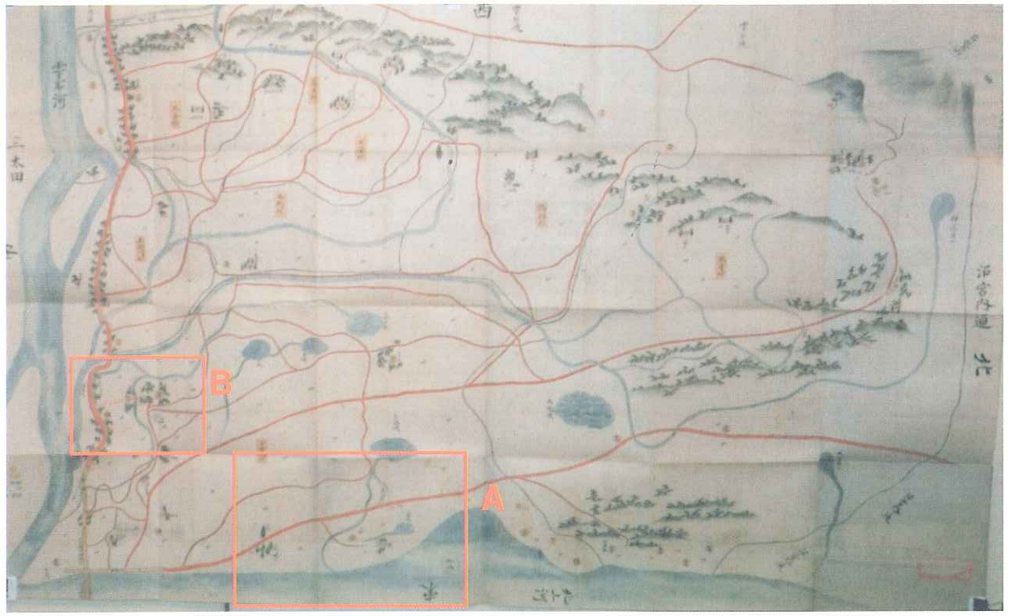
天正 20 年(1592)に破却された諸城のいくつかは絵図上に「古城」という表現で描かれていますが、栗谷川城は正保期の国絵図では「古城　栗谷川城　阿部貞任宗任陳場」と表記されていますが、元禄期及び天保期の国絵図では「栗谷川古城」、挿図の『南部領惣絵図』(天保四年)では、朱書線の鹿角街道を跨ぐ形で単に「古城」と書き改められています。

「南部領内総絵図」(部分)　正保年間(1644～1648)

旧南部家本　もりおか歴史文化館 所蔵

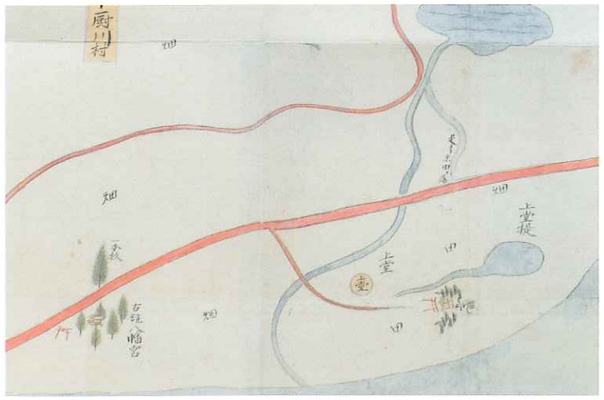
「南部領惣絵図」(部分)　天保四年(1833)

旧南部家本　もりおか歴史文化館 所蔵



江戸時代の厨川①　「厨川通絵図」　安永九年(1780)

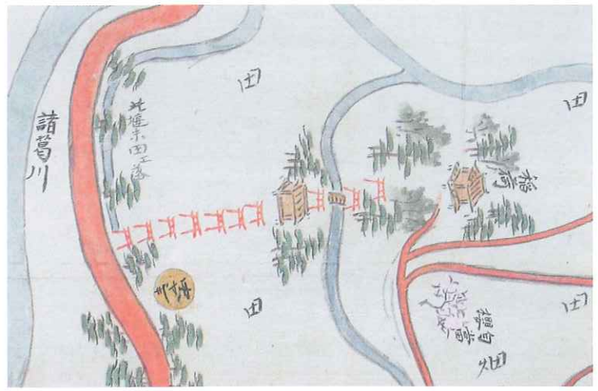
旧南部家本　もりおか歴史文化館 所蔵



絵図は右側を北とし、巌鷲山(岩手山)を右上、左が秋田街道と雫石川、下には鹿角街道と北上川が配され、厨川台地全体が描かれている。社堂には厨川稲荷・天昌寺・阿弥陀堂・住吉社など、多くが現存している。

A

北上川右岸の栗谷川城跡は当時「古城」ないし「古館」と表記され、社も「古館八幡宮」と記されている。街道向いには大木であろうか、「一本枚(杉)」が描かれ、また北側の現在の上堂周辺には「上堂堤」と「観音(堂)」、北上川中洲には「蛇ノ嶋」が位置している。



B

南部(画像左)の秋田街道から北に伸びる鳥居の先には厨川稲荷の堂宇が橋を挟んで二棟描かれている。その下(東)には栗谷川工藤氏の居館であった勾当館跡に咲く「勾當櫻」が描かれている。

Ⅵ 前九年合戦ゆかりの地とその伝承

安倍氏の最後の拠点となった厨川柵・嫗戸柵は、雫石川の北岸地域に存在したものと考えられますが、現在までにその遺跡の所在地は明らかになっていません。

今まで厨川柵疑定地とされてきた安倍館遺跡(安倍館町)や里館遺跡(天昌寺町)については、どちらも中世城館跡であり、安倍氏時代の遺構と遺物は現時点では全く発見されていません。しかし滝沢村を含めた雫石川流域や市内の安倍館町・上堂・前九年・北夕顔瀬町・夕顔瀬町・境田町など厨川地域を中心に、安倍氏や源義家(八幡信仰)に関係する伝承地や伝説が多く残されているのも事実です。

※ここでは一般的に伝承されている内容で解説していますが、安倍氏や源義家ゆかりの伝承地や伝説は大変多く、寺社の由緒書や地元では異なった内容で伝わっている場合もあります。巻末の資料編にも活字化された伝説・伝承の一部を原文のまま掲載しました。

厨川・上田周辺

○ **敵見ヶ森**(てきみがもり) **(前九年三丁目)**：前九年合戦の時の安倍氏の見張台といわれる。安倍氏の女性達がこの櫓に上から源氏軍を嘲り、悪口を並べて挑発したという。近くに安倍貞任夫人の袖萩という人の住まいがあったともいわれている。

○ 敵見ヶ森(狐森稲荷) (前九年三丁目)

○ **手掛の松**(てかけまつ) **(高松二丁目)**：厨川柵が攻撃されている時、源氏に通じ、安倍氏の内情を漏らした女性が、敵方に内通したことが露見していたたまれなくなり、柵から逃れて北上川を渡ろうとしたが、対岸は崖で登れず難渋した。ちょうどその時に手ごろな松が見つかり、それに掴まって岸に上がることができたという。

○ **八幡森**(はちまんもり) **(高松四丁目)**：康平五年九月、源頼義と義家が北上川を挟んだ対岸の厨川柵攻めの時の本陣跡と言われている。

○ **尻切田螺**(しりきりたにし) **(安倍館町)**：厨川柵の戦いが続き兵糧に困った安倍氏が、田螺が早く煮えるようにするために、田螺の尻の尖ったところを切断した。それ以後、安倍館の田螺は尻の切れた形になったという。

○ 手掛の松緑地 (高松二丁目)

○ 八幡森(東側高松神社から望む) (高松四丁目)

○ **厨川八幡宮**(くりやがわはちまんぐう) **(安倍館町)**：栗谷川城本丸に位置する。康平五年、源頼義勧請の社と伝えられ、歴代盛岡藩主によって再興。寛文8年の古絵図には「栗谷川古城本丸　八幡社」と記されている。

○ **安倍館稲荷神社**(あべたていなりじんじゃ) **(安倍館町)**：厨川城跡(安倍館遺跡)南館に鎮座する妙徳稲荷神社。創建には合戦に翻弄され亡くなった貞任の姫の悲話も残されており、後世の人々によって冥福を祈るため社を建てたと伝えられている。

○ **貞任宗任神社**(さだとうむねとうじんじゃ) **(安倍館町)**：故斉藤たねよさん(明治29年・西磐井郡涌津村出身)が堂の前(下牢：現北夕顔瀬町)に住んでいた頃に前九年合戦や多くの戦いで非業の死を遂げた人々を敵味方の区別なく弔うため、貞任・宗任神社を創建。その後、稲荷神社脇に遷移されたという。

○ 厨川八幡宮(安倍館町)

○ 安倍館稲荷神社 (安倍館町)

○ 貞任宗任神社 (安倍館町)

○ **片葉の葦**(かたばのあし) **(安倍館町)**：合戦で矢の尽きた安倍軍が葦を刈り取って矢に用いた。こののちは葦の片側にだけ葉が伸びるようになったという。

○ **逆杉**(さかさすぎ) **(安倍館町)**：安倍貞任が杖に用いた杉の枝の梢のほうに根がついて成長したものという。

○ **上牢**(かみろう) **(上堂)**：安倍氏の時代、上堂に「上牢」という牢が置かれたという。平成4年(1992)に当該地で発掘調査が行われ、段丘の緩斜面から2間×3間の規模の掘立柱建物跡が発見された。

○ **下牢**(しもろう) **(北夕顔瀬町)**：安倍氏の時代、堂の前（下堂）に「下牢」という牢が置かれた。

○ 片葉の葦(安倍館町)

○ 上堂頭遺跡で発見された掘立柱建物跡
(2間×3間) (上堂四丁目)

○「下牢」があったとされる片原の阿弥陀堂
(北夕顔瀬町)

Ⅷ・史料(資料)編

□ 歴史史料

一、陸奥話記……二一
二、今昔物語集……一八
三、宇治拾遺物語……二七
四、扶桑畧記……二八
五、朝野群載……三〇
六、本朝続文粋……三一
七、吾妻鏡……三二
八、陸奥風土記……三三
九、邦内郷村志……三三
十、奥羽観蹟聞老志……三四
十一、舊蹟遺聞……三五
十二、奥々風土記……三六
十三、盛岡砂子……三七
十四、内史畧前五……三八
十五、内史畧前十二……三九
十六、御領分社堂……三九

□ 明治期以降の地誌・市町村史・新聞記事ほか

一、厨川八幡宮と厨川柵址……四一
二、岩手県管轄地誌……四六
三、岩手郡誌……四七
四、厨川の柵……四九
五、嫗戸考……五八
六、前九年戰役ニ関スル話……五九

□ 前九年合戦ゆかりの地とその伝承

一、滝沢村の地名……六三
二、盛岡の伝説……六五
三、都南の民話……六九
四、遠野の昔話……六九
五、遠野物語……七〇
六、もりおか明治船来づくし……七一
七、雫石町史……七二
八、雫石の寺社……七三
九、岩手の伝説……七四
十、岩手の伝説を歩く……七七

盛岡市遺跡の学び館　第11回企画展
前九年合戦終結九百五十年記念事業

「検証！厨川柵　―古代末期のもりおか―」

平成24年(2012)10月16日　発行
編集・発行　盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1
TEL 019-635-6600　FAX019-635-6605
E-mail iseki@city.morioka.iwate.jp
URL http.//www.city.morioka.iwate.jp/moriokagaido/rekishi/manabikan/index.html
印刷　小松総合印刷株式会社